ISSN 1882-434X
東北大学文学部・文学研究科
November 2016 Vol.11

考えるということ

街へ、時代へ、跳びだした 東北大学文学部ブックレット

この本の立場▶実利偏重・通俗功利主義がはびこる時代、東北大学文学部・文学研究科は、あえて「人文知の価値」を示したいと思います。この本は、軽佻浮薄な文化への対立軸としての重厚な伝統的学問文化を守り、発展させる媒体です。現実の問題から目をそらすのではありません。「企業の社会的責任」を意識する先進的な企業と対話・連携し、あるいは書店や図書館、地域社会との対話を通して、人文社会学的立場から、責任を持った発言をしていきます。さらに、大学で学びつつある、あるいはこれから大学で学ぼうとする若い世代に、「真の実学」としての人文社会学の心髄を伝えたいと思います。ネットを中心に、匿名性を隠れみのとした無責任な発言が、なんとあふれかえっていることでしょう。この本では、研究者ー高校生・大学生ー卒業生ー企業ー地域社会を結んで、<文学部流>を徹底したらこうなる、という情報の発信をめざしていきます。

巻頭シリーズ 11
巻頭レポート
「臨床宗教師」養成講座の現在、そしてこれから ― 2

東北大学文学部の歴代研究者メモリアル 11
弓道と禅に打ち込んだ哲学者
オイゲン・ヘリゲル博士 ― 9

文学部の研究紹介 11
フランス語・フランス文学
フランス語研究から言語学研究へ
阿部宏 教授 ― 13

文学部ゆかりの宝もの 11
漱石研究にも欠かせない
小宮文庫 ― 20

思考する力

1876年には電話での会話が成功し、それより1843年にはファクシミリが発明されて、電送による情報伝達と情報蓄積という新しい時代が始まった。そして、近年のパソコン通信、インターネットの進化により、伝達・蓄積量はケタ違いのものになっている。この間、伝達の媒体もまた電線から無線での携帯電話や無線LAN、Wi-Fiに変わり、さらには量子や素粒子の利用にまで進化していくことが考えられている。パソコンなどを動かすエネルギーである電気もまた送電線を必要とせず、宇宙空間で発電して地球へ無線送電する道が模索されている。もちろん、これらは「手段」の話である。私たちの思考の範囲では、いずれ電線も見られなくなるなど、どこまでも変化していくことは想定内のことであると言えるだろう。どのようにコントロールし、利用していくか。それこそが、私たちの思考の力であり、愉しみではないか。

仙台近郊の秋保温泉には小宮が「磊磊峡」と名づけた美しい観光名所があります。

文学部ゆかりの宝もの 11

漱石研究にも欠かせない 小宮文庫

小宮文庫の書棚

東北大学附属図書館には、夏目漱石の遺族から寄贈された膨大な蔵書が「漱石文庫」として所蔵されています。この寄贈を実現したのが、当時、附属図書館長をしていた小宮豊隆でした。漱石の門人であった小宮が漱石夫人との交渉に当たり、1944年に移管手続きを完了したのです。

小宮豊隆は1923-24年にヨーロッパに留学した後、25年に東北帝国大学法文学部教授に就任（在籍期間1925-46）、ドイツ語、ドイツ文学の教育、研究に携わりました。また、東京帝国大学独文科で学んでいた時代に漱石門下となった小宮は、寺田寅彦や芥川龍之介らと交流し、能、歌舞伎、俳句などの伝統芸術にも造詣が深い文学者であり、仙台では、同僚の阿部次郎らと共に文学サロンなども開き、文学の普及にも活躍しました。

これらの幅広い活動の中で蓄積された蔵書や研究資料が、東北大学附属図書館の個人文庫の一つである「小宮文庫」となっています。漱石研究上重要な資料をはじめ、トルストイ、プラトン、森田草平、志賀直哉、武者小路実篤の作品なども含めた多彩な文庫となっています。

写真は晩年の小宮豊隆

［発　行］東北大学大学院文学研究科　〒980-8576　仙台市青葉区川内27-1
tel.022-795-6003（総務係）　fax.022-795-6086　［URL］http://www.sal.tohoku.ac.jp/index-j.html
［編　集］文学研究科研究広報室　［発行年月］2016年11月

「臨床宗教師」養成活動の現在、そしてこれから

東北大学文学研究科には、東日本大震災への対応の中から２０１２年度に始まった「臨床宗教師」を養成する「実践宗教学寄附講座」があります。

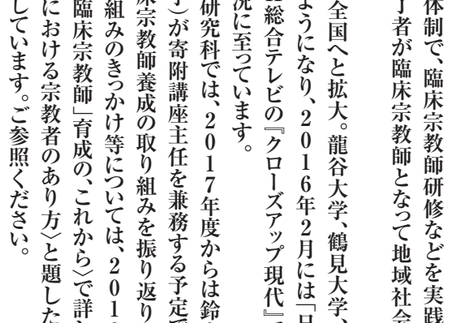
地震と津波により多大な被害を受けた東北の被災地では、地元の宗教者、医療者、研究者が連携して取り組んだ「心の相談室」など、被災者の心のケアのための支援活動も活発に行われました。宗教者が、それぞれの宗教の立場を超えて連携し、支援活動を行ったことが一つの要因であったと考えられます。そこから、さまざまな信仰を持つ人々の宗教的ニーズに応えることのできる人材が必要なのではないかという洞察が生まれました。そのような専門職（「臨床宗教師」と命名）の育成を行うために、地元の宗教界などの支援を受けて「実践宗教学寄附講座」が設立されました。

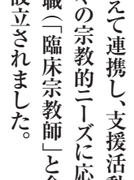
宗教学研究室主任・鈴木岩弓教授（宗教民俗学）を代表に、谷山洋三准教授（臨床死生学）、高橋原准教授（宗教心理学）の体制で、臨床宗教師研修などを実践。５年目に入った２０１６年現在、東北大学の講座からは１４１名の修了者が臨床宗教師となって地域社会へと飛び立っています（２０１６年度末には１５２名の予定）。

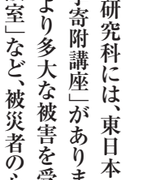
この間、活動は全国へと拡大。龍谷大学、鶴見大学、高野山大学、武蔵野大学、種智院大学、上智大学で取り組みが行われるようになり、２０１６年２月には「日本臨床宗教師会」が発足しました。そして２０１６年８月には、ＮＨＫ総合テレビの『クローズアップ現代』でも、医療や介護の場での臨床宗教師の仕事ぶりが紹介されるような状況に至っています。

東北大学文学研究科では、２０１７年度からは鈴木教授の退職に伴い、宗教学研究室主任である木村敏明教授（宗教人類学）が寄附講座主任を兼務する予定です。そのような変化も含めて、東北大学の「実践宗教寄附講座」と臨床宗教師養成の取り組みを振り返り、現在の姿と、これからへの道筋を俯瞰してみましょう。

なお、この取り組みのきっかけ等については、２０１３年７月発行『ブックレットｖｏｌ.８』巻頭の〈「臨床宗教師」育成の、これから〉で詳しく紹介しています。また、鈴木教授の〈「臨床宗教師」誕生　公共空間における宗教者のあり方〉と題した論文（『他者論的転回』所収。２０１６年３月）が、考え方と経過を概括しています。ご参照ください。


第八章　「臨床宗教師」の誕生


鈴木岩弓教授


木村敏明教授

谷山洋三准教授

高橋原准教授

臨床宗教師研修追悼巡礼（名取市）

「実践宗教学寄附講座」開設からのあゆみ

宮城県では、震災まもなくの時期から仙台仏教会と仙台キリスト教連合が協働し、宮城県宗教法人連絡協議会の活動として、斎場の一角に机を置いて「心の相談室」と名づけ、遺族の求めに応じて宗派や宗教を超えた弔いやお祈りを行いました。その後、それに賛同した人々が声を上げ、集まり、２０１１年５月には、より組織的な活動とするために新しい「心の相談室」が発足しました。

その事務局長として参加していたのが、鈴木岩弓教授です。岡部健室長（医療法人爽秋会理事長。東北大学医学部卒。２０１２年９月**でいます）の育成を行うために、地元の宗教界などの支援を受けて設立されました。**

講座の設置期限はさしあたり3年間で、基礎研究を行いながら研修プログラムを作成し、「臨床宗教師」を育成することを目指しています。第一回の研修を２０１２年10月から開始するために準備しています。

ちなみに、「臨床宗教師」とは、公共空間で心のケアを行うことができる宗教者を意味するものとして、英語の「チャプレンchaplain」の訳語として故岡部健医師が考案した名称です。布教や伝道を行うのではなく、相手の価値観を尊重しながら、仏教、キリスト教、神道などさまざまな信仰を持つ宗教者が協力し、宗教者としての経験を生かして、苦難や悲嘆を抱える方々に寄り添います。

◆

東北大学文学研究科の実践宗教学寄附講座運営委員会では、２０１２年９月に「臨床宗教師倫理綱領」、２０１５年５月に「臨床宗教師倫理規約（ガイドライン）」を制定し、講座の運営、臨床宗教師育成に万全を期しています。

■臨床宗教師倫理綱領（はじめに及び抜粋）

宮城県宗教法人連絡協議会等の支援を受けて設立された「心の相談室」は、東北大学大学院文学研究科に開設された「実践宗教学寄附講座」の運営に協力するため、「実践宗教学寄附講座運営委員会」を設置した。実践宗教学寄附講座では、宗教・教派・宗派の立場をこえて人々のニーズに応える「臨床宗教師」の育成を目指している。実習を含めた臨床宗教師の現場での活動を適切なものにするべく、関係者は本倫理綱領を共有する。

＜ケア対象者の人間として、個人としての尊厳を尊重する＞（説明略）
＜人種、性、年齢、信仰、国籍等によって差別しない＞（説明略）
＜ケア対象者の信念、信仰、価値観の尊重＞（説明略）
＜臨床宗教師自身の信仰を押しつけない（ケア対象者の信念・信仰、価値観の尊重）＞（説明略）
＜ケア対象者に関する情報の守秘義務＞（説明略）
＜アドボカシー（ケア対象者のエンパワーメント）＞（説明略）
＜情報の適切な扱い＞（説明略）
＜臨床宗教師としての適切な振舞＞（説明略）
＜所属組織の規律遵守＞（説明略）
＜同僚との良好な関係の維持＞（説明略）
＜他の組織との良好な関係の維持＞（説明略）
＜宗教間の良好な関係の促進＞（説明略）
＜自立的かつ持続的な体制の構築＞（説明略）
＜自己向上義務＞（説明略）

■臨床宗教師倫理規約（ガイドライン）（前文及び抜粋）

臨床宗教師は同時に宗教者でもある。臨床宗教師としての倫理と、所属する教団の倫理の双方を遵守することが求められる。すなわち公共空間において活動する場合は、宗教者としての倫理に加えて臨床宗教師の倫理を守る義務がある。（中略）

本規約は、「綱領」（注：「臨床宗教師倫理綱領」）の理念尊重の上、臨床宗教師が陥りがちな倫理問題についてより具体的な注意を喚起することによって、問題の発生を未然に防ぎ、臨床宗教師の質を確保・向上させ、ケア対象者の福祉を改善しようとするものである。

規約の適用は、臨床宗教師研修の受講と共に始まり、研修終了後もこれを遵守しなければならない。

1. 臨床宗教師は、ケア対象者の自律性を尊重しなければならない。（以下、解説略）
2. 臨床宗教師は、ケア対象者を傷つけてはならない。（以下、解説略）
3. 臨床宗教師は、ケア対象者を公正・平等に扱わなければならない。（以下、解説略）
4. 臨床宗教師は、活動する公共空間において、そのルールを遵守しなければならない。（以下、解説略）
5. 臨床宗教師はケア対象者の秘密を守りつつ、派遣先の情報共有のルールを遵守しなければならない。（以下、解説略）
6. 臨床宗教師は、布教ととられる行為を行わず、地元の宗教者と友好関係を保たなければならない。（以下、解説略）
7. 臨床宗教師は、ケア対象者と多重関係をもってはいけない。（以下、解説略）
8. 臨床宗教師はケア対象者から金員を受け取り、ケア行為を宗教的宣伝に使うなど個人的欲求または利益のために行動してはならない。（以下、解説略）
9. 臨床宗教師は、自己研鑽と相互研鑽につとめ資質の向上を図らなければならない。そのために臨床宗教師会に所属し、研修会に参加する責務を負う。会の認めるスーパーヴァイザーの指導にもとづき事例を研究する必要がある。（以下、解説略）
10. 臨床宗教師は、その名誉を守り、質を保証するため、倫理綱領および本規約を遵守しなければならない。臨床宗教師としての活動に倫理的疑義が生じた場合、実践宗教学寄附講座（以下寄附講座）は、実践宗教学寄附講座諮問委員会（以下諮問委員会）に諮問する。諮問委員会は設置した倫理委員会に当該案件を調査・審議させ、処遇案を寄附講座へ答申する。処遇は、注意、再教育、活動停止、臨床宗教師名称使用の停止などである。（以下、解説略）

（前略）この講座は、諸宗教が協力し合い、学び合う環境をととのえ、日本的チャプレンとでもいうべき専門職（仮に「臨床宗教師」と呼ん

2016年3月現在、141名の修了者誕生

4月に始まった「実践宗教学寄附講座」は、2014年度までの3年度で6回の臨床宗教師研修と2回のフォローアップ研修を行い、93名の修了者を送り出しました。

さらに、2015年4月には2年度の延長が決まり、4回の臨床宗教師研修のプログラムが進められており、2016年8月現在、新たに48名が修了者となっています。最近では、特にフォローアップ研修に力をいれており、年間5～6回くらいに増やして各地で実践する形になっていることが結果につながっていると言えるでしょう。

研修のプログラム、実践活動などの講座の内容は、その都度『東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター』で報告されており、受講者の生の声も知ることができます。また、「東北大学大学院文学研究科 実践宗教学寄附講座」のサイト上（http://www.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/neo/wiki.cgi）でも見ることができます。

また、2016年3月には、谷山洋三准教授が『医療者と宗教者のためのスピリチュアルケア 臨床宗教師の視点から』を出版（中外医学社）。臨床宗教師研修で講義されている内容が、分かりやすくまとめられています。本書は「0章 私の歩み」「1章 臨床宗教師のモデル」「2章 生活の中にある心のケア」「3章 スピリチュアルケア」「4章 宗教的資源を活用したケア」「5章 臨床宗教師の可能性」「6章 臨床宗教師の資質」の構成となっており、帯には、以下のメッセージがまとめられています。

絶望の淵に立ち尽くす人が、こころの元気と自らの生きる力を取り戻すのに必要な「わたしを支えてくれる何か」を、その人に寄り添い、共に探す…
それが「スピリチュアルケア」です。
からだのケアのプロフェッショナルである医療者の方々にこそ知っていただきたい、
「こころのケアの処方箋」がここにあります。

■臨床宗教師養成に関する5年間のあゆみ

2011年	5月、「心の相談室」結成 11月、故岡部健先生追悼緊急シンポジウム主催 「医師岡部健が最後に語ったこと」
2012年	4月、実践宗教学寄附講座運営委員会設置（2015年7月、諮問委員会と改組） 4月、「実践宗教学寄附講座」開設。6回の「臨床宗教師研修」スタート 9月、「臨床宗教師倫理綱領」制定（2013年8月改訂） 9月、日本宗教学会2012年度学術大会でパネル発表 「公共空間における宗教的なケアのありかた：臨床宗教師の可能性」 9月、機関誌『東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター』創刊 10～11月、第1回臨床宗教師研修開催
2013年	2～3月、第2回臨床宗教師研修開催 3月、パネルディスカッション主催 「「東日本大震災と宗教者・宗教学者」のご報告 4～7月、第3回臨床宗教師研修開催 5月、オンデマンド研修開始 6月、第1回フォローアップ研修開催 10～12月、第4回臨床宗教師研修開催
2014年	1～3月、スピリチュアルケア講座実施 2月、チャプレン養成をめぐる諸事情についてアメリカ視察 3月、第2回フォローアップ研修開催 5～7月、第5回臨床宗教師研修開催 10～12月、第6回臨床宗教師研修開催 11月、病院におけるチャプレンの活動についてアメリカ視察 11月、ETV特集「臨床宗教師」 12月、北海道東北臨床宗教師会発足 以後、関東臨床宗教師会、中部臨床宗教師会、関西臨床宗教師会、中国地方臨床宗教師会、九州臨床宗教師会発足 この年、「実践宗教学寄附講座」が日本スピリチュアルケア学会認定プログラムに承認
2015年	3月、第3回フォローアップ研修開催 3月、国連防災会議（仙台市開催）でパブリックフォーラム「震災と宗教者の役割」主催 4月、「実践宗教学寄附講座」延長。4回の「臨床宗教師研修」スタート 5月、「臨床宗教師倫理規約（ガイドライン）」制定（2015年7月改定） 5～7月、第7回臨床宗教師研修開催 9月、関西臨床宗教師フォーラム2015共催 10～12月、第8回臨床宗教師研修開催 10月～翌年1月、実践宗教学試論2016後期（木曜5限）開講 12月、シンポジウム「いま知りたい臨床宗教師」主催
2016年	2月、「日本臨床宗教師会」設立 「設立記念シンポジウム臨床宗教教育の可能性」開催 5～7月、第9回臨床宗教師研修開催 8月、NHK総合テレビ『クローズアップ現代』で臨床宗教師特集 9月、機関紙『東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター』10号発行 10～12月、第10回臨床宗教師研修開催

谷山洋三准教授著
『医療者と宗教者のためのスピリチュアルケア』

東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター
第10号（2016年5月15日発行）

臨床宗教師が医療や介護の場にも着実に

修了者は全国に飛び立ち、東日本大震災などの被災地へ、医療現場や介護現場へ、生涯学習や福祉教育の現場へと、心のケアが求められるさまざまな場所で活躍の場を見つけています。この1年半くらいの間に、急激に雇用者が増え、緩和ケア病棟や在宅緩和ケアなどの現場での活動が目立ってきています。それらは、リストのような概要となっています。

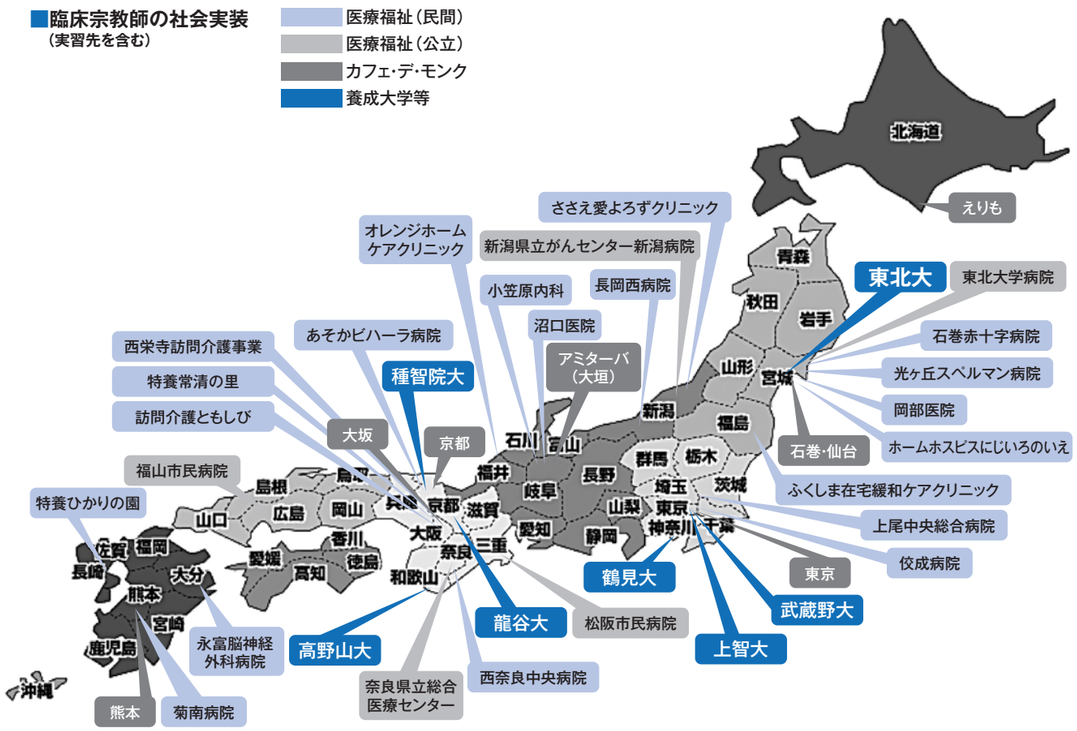
最近では、公立病院の一員として採用されて活動している例も増えてきています。例えば宮城県では、東北大学病院です。東北大学病院では緩和ケア病棟に雇用された臨床宗教師が週2日ケアに携わり、並行してがんカフェにも呼ばれています。三重県松阪市の松阪市民病院緩和ケア病棟（週3日）でも1名雇用されています。京都府では、府が資金を出して臨床宗教師による自死遺族のケアを始めています。

さらに民間の医療現場では、例えば岐阜県大垣市の沼口医院の臨床宗教師による在宅緩和ケアなどが注目事例になっています。

まさに、谷山准教授が著書で医療者に呼びかけたような方向へと進んでいるのです。ここには、病院が機能評価の審査を受けた時に、臨床宗教師の存在がかなり高く評価されるという最近の事情も反映されていると言えるかもしれません。

なお、2014年12月には、東北、北海道地域の修了者が地域での連携とフォローアップ研修の継続を目指して北海道東北臨床宗教師会を発足。その動きは関東臨床宗教師会、中部臨床宗教師会、関西臨床宗教師会、中国地方臨床宗教師会、九州臨床宗教師会へと拡大し、活動の様子は『ニュースレター』の「各地の動き」欄で報告されるようになっています。

現場の臨床宗教師　沼口医院 田中至道さん



「日本臨床宗教師会」の発足

2016年2月、より多くの人たちの精神的な苦しみに寄り添うことを活動目標とする臨床宗教師の全国組織として、日本臨床宗教師会(Society for Interfaith Chaplaincy in Japan)が発足し、あわせて「設立記念シンポジウム臨床宗教教育の可能性」も開かれました。上智大学グリーフケア研究所・島薗進所長を会長に、東北大学文学研究科の実践宗教学講座に事務局を置き、谷山准教授が事務局長となって活動が始められています。谷山准教授は日本スピリチュアルケア学会の立ち上げにも関わった研究者であり、日本臨床宗教師会の立ち上げにも中心的な役割を果たしたのです。

その考え方は、その時発表された「設立趣意書」にまとめられており、東北大学文学研究科の実践宗教学講座の取り組みの進展が反映されています。全文を掲載しましょう。

この動きは、現実のものとなってきた多死社会などを背景に、医療現場でも「死」に向かう心のケアが問われる中、臨床宗教師の質を高め、活動の場を広げることが切実に認識されるようになっていることの証左でしょう。会では、全国にある6つの地方臨床宗教師会と連携・協力し、講座を持つ8つの大学の修了生に対して共通のフォローアップ研修を行ったり、養成プログラムの向上を図ったりすることに取り組んでいます。

加えて、会では、日本スピリチュアルケア学会との連携、「認定臨床宗教師」の統一資格の創設なども進められています。

この結果、これらの活動に対する注目度は高まり、約3日に1回の比率で全国各地の新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、インターネットなどで取り上げられています。2016年版『現代用語の基礎知識』にも、「臨床宗教師」の項目が掲出されました。〈**公共的な施設で働く宗教者を指す一般的用語。東日本大震災を契機にして、2012年度より東北大学大学院文学研究科に実践宗教学寄附講座が設けられた。14年度には龍谷大学大学院実践真宗学研究科に臨床宗教師研修が設置されるなど広がりをみせている。**〉と記されています。

■日本臨床宗教師会「設立趣意書」

日本臨床宗教師会
Society for Interfaith Chaplaincy in Japan
設立趣意書

人はさまざまな苦難の中で自己の支えを失ってしまい、「なぜこのような目にあうのか」「生きる意味はどこに」と頭をかかえます。「日本臨床宗教師会(Society for Interfaith Chaplaincy in Japan)」は、困難にあえぐ人々の悲しみに寄り添いつづけた宗教者の伝統と臨床経験を尊重し、「臨床宗教師」の養成に取り組む諸大学の研究者、宗教、医療、社会福祉等の専門職、臨床宗教師研修修了生の有志が集い、相互に研鑽し、「臨床宗教師」に関する倫理綱領の遵守、養成教育・継続教育の支援と連携、実践と教育に関する研究、啓発、資格認定、関係諸機関との連携を推進することをめざして設立いたします。

「臨床宗教師(interfaith chaplain)」とは、被災地や医療機関、福祉施設などの公共空間で心のケアを提供する宗教者です。「臨床宗教師」という言葉は、欧米の聖職者チャプレンに対応する日本語として、岡部健医師が2012年に提唱しました。「臨床宗教師」は、布教・伝道を目的とせずに、相手の価値観、人生観、信仰を尊重しながら、宗教者としての経験を活かして、苦悩や悲嘆を抱える人々に寄り添います。さまざまな専門職とチームを組み、宗教者として全存在をかけて、人々の苦悩や悲嘆に向きあい、かけがえのない物語をあるがまま受けとめ、そこから感じ取られるケア対象者の宗教性を尊重し、「スピリチュアルケア」と「宗教的ケア」を行います。「臨床宗教師」の呼称は、チャプレン、ビハーラ僧、パストラルケアワーカー等を包み込み、宗教宗派を超えて宗教者が協力する願いがそこに込められています。仏教、キリスト教、神道など、さまざまな信仰を持つ宗教者が協力しています。

2011年の東日本大震災を機に、医師・看護師らによる心のケアと共に、宗教者による被災地支援活動がさまざまに展開し、悲しみに寄り添う宗教者の社会的実践が被災者にとって生きる希望となりました。支えたい宗教者自身が被災者の優しさに支えられ、生きる意味を学びました。これを承けて、2011年に宗教学者らによって宗教者災害支援連絡会が設立され、2012年から東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座において理論教育と臨床実習を組み合わせた臨床宗教師研修が始まり、その後、諸大学研究機関もこれに取り組んでいます。すでに修了者は150名を超え、全国各地で活動しています。ソーシャルキャピタルとしての宗教の役割が見直され、社会から臨床宗教師への期待も高まりつつある中で、「日本臨床宗教師会」は、現場に立つ者と教育を担う者が協力して、臨床宗教師の教育と実践を支援し、そのあるべき姿を検討する共通基盤を構築してまいります。将来的には、臨床宗教師が新しい専門職として心のケアを実践するために、臨床宗教教育の継続研修に基づいて「臨床宗教師」資格認定制度を確立することを視野にいれています。

さかのぼれば、チャプレン、教誨師、パストラルケアワーカー、ビハーラ僧、スピリチュアルケアワーカー、スピリチュアルケア師、臨床仏教師、もしくは寺社教会の内外での社会貢献などさまざまな形で、宗教者は世界の安寧を願い、苦悩する人々のために献身してきました。「日本臨床宗教師会」はこうした先駆者たちに敬意を払いつつ、公共空間でケアを提供する宗教者の研鑽と、学び合いの場を作ります。大いなるものの慈しみにいだかれて、謙虚に自己をふりかえります。

あらゆる領域において、苦悩する人々に寄り添い、祈り、光を届けられる社会になるよう、貢献したいと思います。

2016年2月28日
日本臨床宗教師会役員一同

日本臨床宗教師会発足式

NHK『クローズアップ現代』などでも注目の取り組みに

2016年8月25日、NHK総合テレビ『クローズアップ現代』で、「〝穏やかな死〟を迎えたい ～医療と宗教　新たな試み」と題して、医療現場での臨床宗教師の取り組みがクローズアップされました。「心の相談室」～「実践宗教学寄附講座」～「臨床宗教師研修」と進んできた東北大学文学研究科宗教学研究者たちの実践、そして修了者たちの地道な活動が全国的に評価された成果であると言えるでしょう。

NHKのウェブサイトによれば、番組は以下のような考えでのオープニングとなっています。

「死んだらあの世にいくのか？」「死んだら無になってしまうのか？」がんなどで余命わずかとなり、死期が迫ったとき、誰しもが抱く不安や恐怖。これらの不安を和らげるため、いま全国の病院に、僧侶や牧師が入り、末期患者に寄り添い始めています。無宗教だった女性が、宗教者の力を借りて、穏やかな最期を迎えるドキュメント。タレントの壇蜜さんと、現役緩和ケア医と共に、新たな〝死の処方箋〟を考えます。

◆

番組では、そもそも臨床宗教師の必要性を最初に訴え始めたのは岡部健医師であり、その考えに賛同し、活動に協力していた東北大学で2012年から臨床宗教師の養成が始まったことを紹介した上で、今では8つの大学に広がり、全国40の都道府県で、およそ200人の臨床宗教師が誕生していると説明。医療や介護の現場に入っている臨床宗教師の一人として、東北大学の寄附講座を修了し、岐阜県大垣市のホスピスで余命わずかな患者さんと家族に対応している野々目月泉さんの姿をクローズアップしています。

この番組によって、医療や介護の現場での切実な心のケアの問題と臨床宗教師の関係が、一段と身近なものと理解されるようになったに違いありません。

臨床宗教師研修追悼巡礼(石巻市)

「臨床宗教師」の提唱者岡部健医師

現場の臨床宗教師　沼口医院 野々目月泉さん

現場の臨床宗教師 樋口泰巧師 カフェ・デ・モンク in 熊本(日本福音ルーテル大江教会、熊本市)

現場の臨床宗教師 九州臨床宗教師会の皆さん 熊本震災支援(益城町)

臨床宗教師研修風景(グループワーク)

臨床宗教師研修風景(講義)

そして、学部・大学院の授業にまで発展

臨床宗教師養成の成果が拡大するとともに、実践宗教学寄附講座の取り組みは、大学内外で注目が高まっています。例えば、ヨーロッパでも、昨年、一昨年、オランダの大学で初めて実践宗教学講座(Practical Religious Studies)が開かれ、宗教学が社会と関わり、接点になるような仕事をしていこうという傾向になっています。また日本では、近年話題になっている地域包括ケアという大きなテーマの中で、地域住民の情報をたくさん持っていて、外にでていくこと(アウトリーチ)を主眼とする臨床宗教師は、これからのコミュニティを形成、再生していく上で重要なファクターになっていくだろうという認識が強まっています。

それとともに、東北大学でも新しい動きが広がっています。

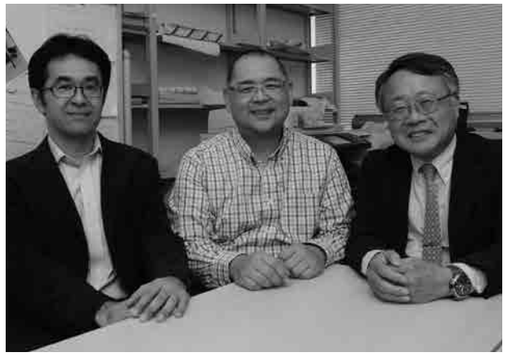
その一つは、実践宗教学寄附講座で「履修証明プログラム」を実施しようとする動きです。これまで研修修了者はあくまで特別講座の修了者でしたが、これを、総長名で修了証書を授与するものにしようということです。

二つ目は、実践宗教学寄附講座の取り組みを2017年度以降も継続できないかという模索です。文学研究科の中期計画の中にはすでに組み込まれており、基幹講座としていくことはできないか議論されています。

そして三つ目が、すでに2012年度から実施されている、学部生、大学院生のための授業です。臨床宗教師研修のために出入りする学外の一般人受講者の姿を目にし、修了者たちが一所懸命に社会貢献のために働いているという情報に接した学生たちは、自ずと臨床宗教師という取り組みへの関心を高めてきました。それに応えて開講したのが、講義とオムニバススタイルの「実践宗教学試論」です。2016年後期のプログラムを見れば、鈴木教授、木村教授、谷山准教授、高橋准教授が講義を受け持っているのが分かります。

授業風景

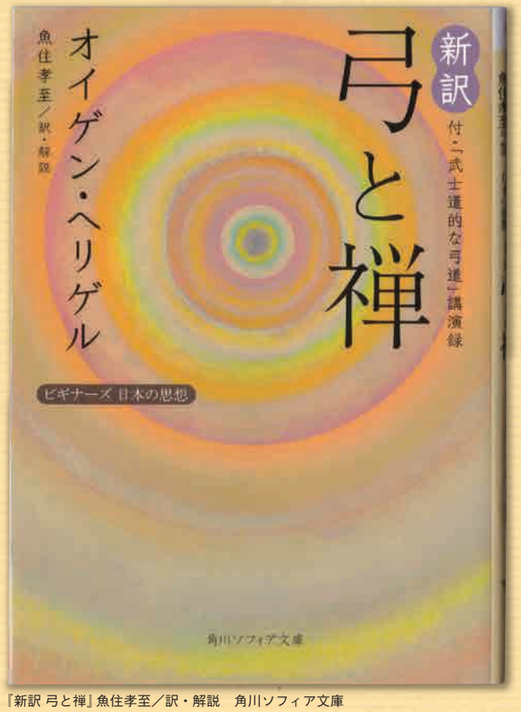
「実践宗教学試論」のチラシ



東北大学文学部の
歴代研究者
メモリアル11

弓道と禅に打ち込んだ哲学者
オイゲン・ヘリゲル博士
Eugen Herrigel

1941年版『日本の弓術』より借用したヘリゲル博士の姿



「新訳 弓と禅」魚住孝至／訳・解説　角川ソフィア文庫

『弓と禅』の新訳刊行!!

2015年12月、東北帝国大学法文学部の西洋哲学史第二講座で哲学と古典語を担当したドイツの哲学者オイゲン・ヘリゲルの『弓と禅』の新訳が、角川文庫から刊行されました。

1924（大正13）－29年（昭和4）に講師の職にあったヘリゲルは、仙台で弓道に魅惑され、ドイツ帰国後に行った講演をまとめた『武士道的な弓道』（Die ritterliche Kunst des Bogenschiessens 1936年）と『弓と禅』（Zen in der Kunst des Bogenschiessens「弓道における禅」（1948年）を著作。講演は『日本の弓術』のタイトルで岩波文庫版となってこれまで気軽に読めるものとなっていましたが、ようやく講演録も一緒にまとめられた上で、『弓と禅』の訳書も文庫版で読めるようになったのです。

文庫版を一つの足がかりに、東北大学でのヘリゲルの足跡を辿ってみましょう。

Profile

1884－1955。ドイツのリヒテナウ生まれ、ハイデルベルク大学で哲学博士の学位を取得した哲学者。1924－29年、東北帝国大学法文学部西洋哲学史第二講座の講師として、小山鞆絵教授のもと、哲学と古典語を担当。新カント派西南ドイツ学派の価値哲学を講じるとともに、日本文化にも深い関心と愛情を寄せた。夫妻共に弓術を愛し、離日後、弓や禅に関する著作も著している。1930年には、「Die metaphysische Form（形而上学的形式）」の論文により東北帝国大学より文学博士の学位を受けた。

『日本の弓術』1941年発行

『弓と禅』1956年発行

『弓と禅』1981年改版発行

ギリシャ語、ラテン語も講じたヘリゲル

東北帝国大学法文学部講師として哲学と古典語を担当していたヘリゲルについては、東北大学史料館に残る「東北大学法文学部略史」のスタッフリストに名前を見つけることができます。

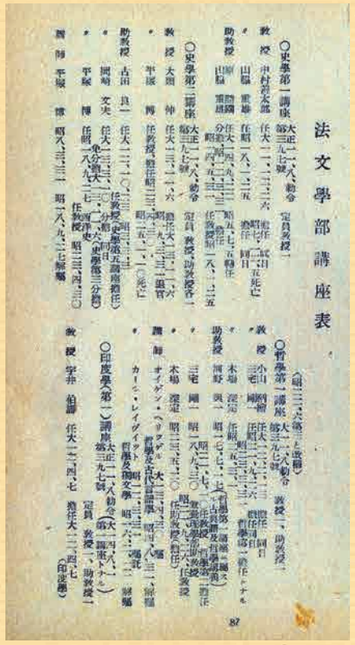
『弓と禅』の1951年版から1981年版までを訳した稲富栄次郎（1897-1975。福岡県生まれ。東北帝国大学法文学部哲学科卒）・上田武（稲富と同期）は共に東北帝国大学法文学部卒業生であり、ヘリゲル講師に学んだ人たちです。『弓と禅』1981年版の巻末には稲富栄次郎の「ヘリゲル先生の想い出」という一文があり、ヘリゲルからどんなことを学んだか、以下のような記述が見られます。

（前略）上田と私とはどの授業もほとんど欠かさず聴講した同学の友であるが、その間博士の人格についての想い出数々ある中でも、特に印象深いのは、何と言っても学問に対する、博士の激しい自信と情熱とである。

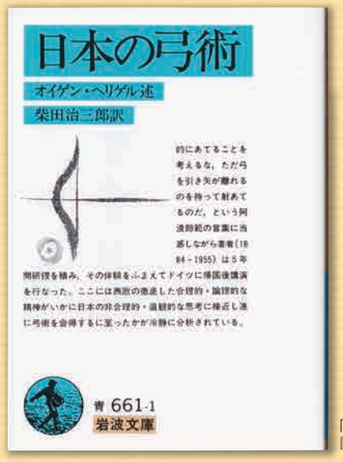
哲学の講義は主に新カント学派、特にハイデルベルヒ学派の価値哲学の問題であり、講読にもまたもっぱらロッチェやラスクなどの著作を用いられた。ハイデルベルヒ学派の哲学に関する限り、博士はつねに満々たる自信をもって臨まれ、講義の途中、時時同学派の伝統を、Kant-Lotze-Windelband-Rickert-Lask-と板書せられたが、その時ラスクの次はいつも疑問符（?）をもって結ばれるのだった。それはこの疑問符の主、外ならぬ我ヘリゲルこそ、これを継ぐべき代表者であることを、言外に漏らされたものであったのである。とりわけ先生はラスクの愛弟子であり、その全集の編集者であるだけに、ラスクに関しては、我こそ世界の第一人者であるという不動の確信を持っていられたようである。

そして、稲富、上田氏らは、ギリシャ語やラテン語での講読なども指導されたのです。

博士は、カントに対する造詣と共に、また古典に関する理解も深かった。上田と私とは、博士のギリシャ語とラテン語の講義に、ほとんど欠かさず出席した。ギリシャ語は初級の文法に続いて、プラトンの"ファイドン"と"シュンポジオン"を読んだ。ラテン語はスピノザの"エティカ"とキケロの"義務論"とを読んだ。今にして特に忘れがたいのは、ギリシャ語上級の授業である。



東北大学法文学部略史
（昭和28年発行）より



「武士道的な弓道」の講演を翻訳した文庫版の『日本の弓術』

■東北大学図書館でみられるヘリゲルの著作（訳書）

日本の弓術 1941年
岩波書店（柴田治三郎訳）

日本の弓術 1982年
岩波文庫（柴田治三郎訳）

弓と禅 1956年
協同出版（稲富栄次郎・上田武共訳）

弓と禅 1959年
福村書店（稲富栄次郎・上田武共訳）

弓と禅 1981年
福村書店（稲富栄次郎・上田武共訳）

新訳 弓と禅 2015年
角川文庫（魚住孝至訳）

なぜ「弓術」に魅かれたのか

では、ドイツで新カント派西南ドイツ学派の哲学者としての道を進んでいたヘリゲルは、なぜ東北帝国大学の講師となり、仙台で弓道に魅かれていったのでしょうか。『新訳弓と禅』には、『日本の弓術』として独立の文庫版となっていた1936年のベルリン独日協会における講演「武士道的な弓道」が新訳で収録され、より具体的に、「弓術」に関するヘリゲルの哲学的な思索が簡単にまとめられています。左に少し長めに引用してみましょう。

「弓術」から何を考えたか

この「武士道的な弓道」の講演録の冒頭には、「弓術」に関するヘリゲルの哲学的な思索が簡単にまとめられています。

弓道について

（前略）

ここから、この弓道の最も内奥の根底、射手の自己自身との対決の本質は何かと問うならば、それに与えられる答えは、まったく理解しがたい、謎めいたものに聞こえるに違いありません。というのは、射手の自己自身との対決は、自己自身を狙うが、また他方自己自身を狙うのではない、時として自己自身を射中て、他方自己自身を射中てない。したがって、弓道が担っている根底は底なしであり、無底と呼ぶべきものです。あるいは、日本の弓道の達人たちの間で使われている表現を用いるならば、弓を射る時には、「不動の中心」であることに全てがかかっています。その時、術は術なきものになり、弓を射ることは、弓と矢で以って射ないことになり、射ないことは、弓と矢なくして射ることになるのです。日本人にとっては、このような逆説的な言い方はまさしく本来的であり、ほとんど自明であり事柄の本質を言い当てています。それに対して我々にとっては、それは疑いもなく、完全に途方に暮れさせます。それ故、これをさらに詳しく話すより仕方ありません。

弓道を学んだ動機

まず、何ゆえに、私がまさにこの弓道を習おうと企てたのか、説明することが必要でしょう。

私は、すでに学生の頃から、神秘主義、特にドイツ神秘主義を詳しく研究していました。けれども、これを完全に理解するためには、私には何かが欠けていることが分かりました。それは、私には現れてきそうにはなく、またどこにも解明する道が見出せない究極のものでした。私は最後の門の前に立ったが、開けるべき鍵が私には欠けているような気がしました。

それ故、東北帝国大学で、数年間勤めてみないかという問い合わせを受けた時、日本の国土と驚くべき民族を知ることが出来る可能性を、喜んで受け入れたのです。それによって「生ける」仏教［禅］に接するだけでなく、そのことによって、マイスター・エックハルト［1260-1327］が、あのように称揚しながら、それへと至る道を叙述していない「離脱」の本質について、多少とも詳しいことを経験することが出来るかも知れないという見通しが開かれたからです。

私は日本に到着するやいなや、自分の意図を実現しようと試みました。しかしながら、ある人が、神秘主義［禅］の修行に直接入るのは、あまりにも困難で、ヨーロッパ人にとって多分見込みがないことだろうと注意してくれ、日本の道の一つを習うことから始めるように勧めてくれました。日本の道はすべてある程度まで仏教の精神を共有しているが、さしあたり「技で掴むことができる」のであり、［そこから］決して掴めないもの、把握できないもの［禅の悟り］へと移行していくのが容易にできるだろうからです。

私の妻は、華道と墨絵を習うことに決めましたが、私は弓道に惹かれました。それは、自分の長年の小銃と拳銃の訓練が役に立つだろうと思ったからですが、その見込みはまったく誤りだったことが後で分かります。私は、偉大な達人・阿波師の下ですでに何年も稽古していた日本人の同僚［小町谷操三］に、彼の師に弟子としていただけるように頼んでほしいとお願いしたのです。

阿波研造に師事したヘリゲル

ヘリゲルは、同じく東北帝国大学法文学部の教員であった小町谷操三（1893-1979。長野県出身）を訪ね、仙台市東二番丁で道場を開いていた阿波研造範士への弟子入りを希望しました。『日本の弓術』中に、小町谷操三の「ヘリゲル君と弓」のタイトルの一節があり、阿波研造の門下生となり、弓道にのめり込んでいく経緯が記されています。

ヘリゲルが師事した阿波研造とは、どのような人物だったのでしょうか。1981年から東北大学学友会弓道部副部長、部長を歴任した池沢幹彦（1965年東北大学理学部卒。東北大学名誉教授）がまとめた『弓聖 阿波研造』（2012年東北大学出版会）の年譜によれば、1880年に大川村（現在の石巻市）に生まれ、仙台範士に師事した後、1902年に自宅裏に武術修練所を開き、1909年に仙台市教楽院丁に弓道場を開いて師範となり、1918年には仙台市内で移転して東二番丁五橋通に道場を開き、1920年には東北帝国大学の弓道師範になったといった流れが分かります。

池沢幹彦名誉教授が東北大学出版会から刊行した『弓聖 阿波研造』

池沢氏は、『弓聖 阿波研造』の「序」において、「**ヘリゲル博士はドイツに帰国した後、九四八年に「弓と禅」という書物を著した。これは阿波範士から禅の手法で弓道の指導を受けた経過を詳細に記したものである。この本は何カ国もの言語に翻訳されて読まれ、世界のベストセラーとなった。（改行）この本の英訳版には鈴木大拙博士による序文が付けられたこともあって、禅の入門書的な役割も果たした。精神分析学のエーリッヒ・フロムのような学者から、アップルコンピューターのスティーブ・ジョブズのような企業家まで、禅に関心を持つ幅広い階層の人々に読まれたのである。**」と記しています。そして、本書の「十四 ヘリゲルの修行」などにおいて、左記のようにヘリゲルの修行ぶりを知ることができます。

十四 ヘリゲルの修行

ヘリゲル夫妻は週に一度、通訳の小町谷操三教授と共に道場にやってきた。その日は一般の門人は来ないようにし、研造は妻フサや娘のミツにもグスティ（注）ヘリゲル夫人）の練習の手助けをさせることにした。フサは弓を引き分ける際に弓と弦に両手を添えて導いてやる「弦取り」が上手で、二高部員などからは研造よりうまいと言われるほどであった。

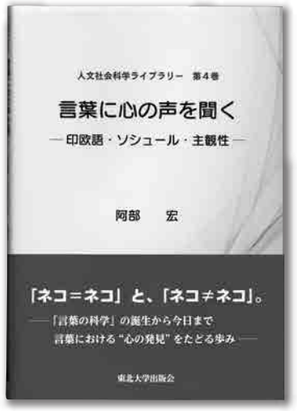
研造からどのような指導を受けたかに関して、後年、ヘリゲルはドイツに帰国後にベルリンで講演をした。（中略）弓道を通して禅を学びたいというヘリゲルを指導した方法は、通常の学生や若者の場合のように、先ず「習射」の段階で技術を教え、その後に射禅見性の射境を目指すというようなやり方とは全く異なっていた。弓禅一味という領域へ、つまり研造の言う第三次の段階へ、直接入って行ったのである。

フランス語研究から言語学研究へ

フランス語学・フランス文学
阿部 宏教授
Abe Hiroshi

Profile

1958年、山形県生まれ。早稲田大学第一文学部卒・同大学文学研究科修士課程修了、学習院大学人文科学研究科博士課程退学。言語文化部助教授、大学院情報科学研究科助教授を経て、2001年、現職へ。日本フランス語学会の編集委員・運営委員・学会誌編集責任者、日本認知言語学会査読委員、日本フランス語フランス文学会長。専門はフランス語学、一般言語学、言語学史、日仏英対照言語学。特に、言語における主観性概念に関心がある。



はじめに：言語研究への拡大

阿部教授は、自著『言葉に心の声を聞く』の「プロローグ」を、以下のように書き出しています。

「アトは任せた」の「アト」は未来のことですが、「もうアトは振り返らないで未来志向で生きていく。」の「アト」は過去の意味です。正反対の概念である未来と過去が、なぜ同じ表現で表されてしまうのでしょうか。使う時に混乱しないのでしょうか。

「ネズミを追いかけている。やっぱりネコはネコだな。」やこの否定の「ネズミを捕らないネコなんてネコじゃない！」のような文は「ネコ＝ネコ」、あるいは逆の「ネコ≠ネコ」のようなナンセンスなことをいっているだけで、情報価値はゼロのはずです。いったい、これらの文は本当は何を述べているのでしょうか。

「量の多少に関わらずご用命ください。」の「多少」は「多」と「少」にそれぞれ意味がありますが、「多少冷たい人」の「多少」は「少し」の意味です。それでは、「多」はなぜ必要なのでしょうか。

「電話は話すための機械だ。それ以上でもそれ以下でもない。」の場合の「以上」、「以下」は、「100人以上の人が集まった」、「入場料、20歳以下は300円」などの「以上」、「以下」とは違って、何を基準にして「以上」や「以下」なのかがはっきりしません。それでも、よくこの言い方を耳にします。この時、「以上」、「以下」は、いったいどういう意味なのでしょうか。

「最高の傑作」はいいのですが、「最高の駄作」という表現はどこか落ち着かない気がしませんか。意味はわかりますが・・・。なぜでしょうか。

これら一連の日本語の言い回しに関する素朴な疑問は、一見、思いつくままにただ例を並べただけのように見えますが、いずれも実は言葉の働きのある基本的な側面に関わっています。人間は言葉によって情報伝達を行っていますが、その情報には同時に話し手の判断が否応なく込められるのです。しかし、それは大部分の場合に無意識に行われますので、話し手自身も自分が判断を下していることに気づきません。近年「主観性」と呼ばれるようになったこの種の心のメカニズムの発見に至るまでに、言葉の研究は長い試行錯誤の時間を経る必要がありました。本書は、言葉の科学の誕生から今日までを、言葉における心の発見という観点から辿ってみたものです。

フランス語学研究を柱とする阿部教授において、このような視点は、どのようにして得られたのでしょうか。フランス語学研究と、どのようにつながるのでしょうか。

フランスの言語学者エミール・バンヴェニスト（1902―1976）の著作の監訳書である『言葉と主体』（1974年著、2013年監訳）や、教授の自著『言葉に心の声を聞く』（2015年著）を主要文献として、阿部教授の視点と研究成果を紹介しましょう。

1. フランス語との出合い

現在、フランス語はフランス本国のみならず、スイス、ベルギー、カナダのケベック州などでも話されているほか、特にアフリカでは約30か国で公用語に指定されています。これらの諸国で公教育が順調に普及していった場合、2050年くらいには英語を抜いて世界で最も話者数の多い言語となる、という推定もされています。

教授の学生時代（1970年代末～1980年代初）は、数年遅れで欧米文化が日本に入ってくるような時代でした。すでにフランスでは構造主義の流行は収束していたのですが、日本の各大学のフランス文学科やフランス語履修学生は、フランスのそのような思潮に漠然と影響を受けていたように思われます。個人にこだわる私小説的文学や心情の素朴な吐露としての文学観を下に見て、意識的なものであれ無意識的なものであれ、作者の戦略が張り巡らされた仕組みとして文学をとらえる、またその分析用のモデルとして言語学に興味を抱く、といったような傾向です。

阿部教授は、そのような流れも踏まえながら言語学へと研究を深めていきました。

2. ソシュールとの出合い

1970年代、学生時代に教授は、構造主義の生みの親であるスイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュール（1857―1913）の**『一般言語学講義』**（小林英夫訳、岩波書店、1972）と出合いました。

「個の集積が体系を作るのではなく、むしろ体系が個を生み出す」、「個は絶対的なものではなく、他の個との関係性によって価値が与えられる」、「個の価値は変化しうるが、その様相は事前に予想不可能である」といったソシュールの主張は、きわめて新鮮で、言語学上の問題というよりも、自分と社会との関わりのあり方を教えられた気がしました。人間はこう生きるべきという押しつけがましいアドヴァイスではなく、個人と社会との関係はどうしようもなくこうなっているのだ、というむしろ諦念的な指摘として心に響いたのです。（ちなみに、阿部学生にはこのようなソシュール解釈は独りよがりな読みにすぎないという思いもありましたが、後年、評論家・西部邁氏の著作上で同様のソシュール体験を発見して大変嬉しい気がしたものです。）

ソシュールとの出合いがきっかけになって、興味は文学から言語学へと移り、同時に数多の外国語の勉強が始まりました。フランス語や英語に加えて、ドイツ語、デンマーク語、ラテン語、ギリシャ語、サンスクリット語などです。

これらの外国語は、全て紀元前数千年前に黒海東岸のクバン川沿いで話されていたとされる「印欧語」なる言語が方言化したものです。例えばフランス語は、印欧語の方言の一つであるラテン語がさらに方言として分化した言語で、イタリア語、スペイン語、ルーマニア語などと同系統です。対して英語は、印欧語の方言の一つであるゲルマン語がさらに方言化した言語で、ドイツ語、オランダ語、デンマーク語などと同系統です。

印欧語の時代には文字がなかったため、語彙や文法については、サンスクリット語、ラテン語、ギリシャ語などの紀元前千数百年前まで遡れる文字資料を基に推測するしかありません。これは、文学部的というよりも、理学部数学科的な方法論を特徴とする研究です。19世紀の言語学といえば専らこの研究であり、これが言語の科学的研究の始まりでした。ソシュールも若い時代はこの研究者でした。

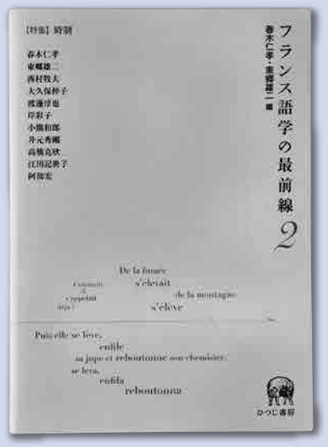
教授は、**『言葉に心の声を聞く』**の第二部「ソシュール」において、以下のような記述でソシュール論を締めくくっています。

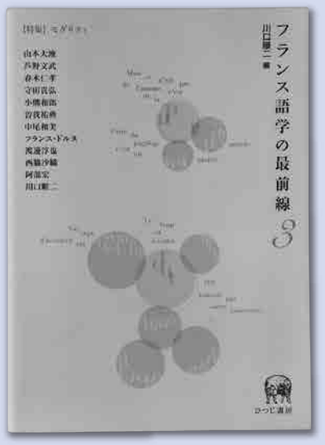
『一般言語学講義』に、「言葉は人が手を加えて変更することができないが、しかし変わらないわけではない。」という、非常に意味深い一節があります。語の意味や発音や文法は時代とともに変わっていきます。語彙も入れ替わっていくでしょう。つまり、時代を超えて不変である物理的法則とは異なり、言語体系は結局は心の働きなので、けっして固定されたものとはなりえず、時間とともに変化します。しかしこの変化は人間が人為的に引き起こすものではなく、言葉の方から自然に生じるものです。人間ができることは、常に受動的かつ無意識的にこれに従うことのみです。

ソシュールは言葉は何よりも心の現象であると主張しました。そして、それまでの通時的研究に対して、共時的研究の重要性を指摘し、その枠組みを基礎づけました。いわば、個人が捨象され、歴史的音変化などのマクロな側面だけで扱われていた言葉を、本来的な各個人の心の世界の方に回復させたといえます。しかし、言葉との関連で彼が見出した心の世界とは、純粋な個人的現象でありながらも、当の個人の主体的な介入を拒絶し、むしろ個人がそれに縛られ操作されるような、冷厳で強制的な規則に支配された心の領域であった、ともいえます。

■東北大学附属図書館でみられる阿部教授の主な著作等

記号を読む：言語・文化・社会　2001年共編著（序説、言語と認知、あとがき）
エミール・バンヴェニスト『言葉と主体』　2013年監訳（監訳者まえがき、言葉と人間の経験　他）
フランス語学の最前線2　2014年執筆（過去の語りに潜在する「わたし」・「いま」・「ここ」）
ひつじ意味論講座 第3巻　モダリティI：理論と方法　2014年執筆（フランス語のムードとモダリティ）
言葉に心の声を聞く：印欧語・ソシュール・主観性　2015年著
フランス語学の最前線3　2015年執筆（疑似主体に基づく主観性について　自由話法の仏日対照を中心に）





ソシュール『一般言語学講義』の翻訳書（1972年 岩波書店）

ソシュールのジュネーヴ大学での授業について、学生がとったノート

3.「文法化」との出合い

各外国語の学習・研究が進展するにつれ、語源など歴史的な側面にまで興味が広がり、各言語間のさまざまな類似点に気づくようになりました。

例えば、各言語における文法の形成、具体的には機能語の語源にはかなりの共通性があります。ラテン語の指示詞（＝英語のthat）はフランス語で定冠詞になりましたが、紀元前のギリシャ語の定冠詞も印欧語では指示詞だったのです。しかし、前者はラテン語がラテン系の諸語に分裂した紀元後の変化であるのに対して、後者は印欧語がギリシャ語に方言化した紀元前の変化です。両者には人的交流などによる影響関係は全く考えられません。

あるいは、世界中の言語間に「食べる」が受動態の文法的構成要素となる傾向が指摘されていますが、日本語でも「先生にお目玉を〈喰らった〉」などの表現があります。また、日本語の「一番目」「二番目」「三番目」などのように、「目」が序数詞のマークとして機能しているのも世界の諸言語でごく普通のことになっています。

人類間に、空間的距離や時代の隔たりを超えて伝達される超能力のような働きを仮定したくなってしまいます。

なぜ、このようなことが起こるのか？――この種の素朴ながら根本的な疑問に、ソシュールおよびその影響下に生まれた構造主義言語学は答えることができません。時制、副詞、比較構文など個々のフランス語の文法現象を研究しながらも、教授には、この言語変化の類似性の問題が不思議な謎としてずっと心に引っかかっていました。

アメリカを中心に「文法化」という研究が盛んに行われていることを知ったのは、1990年代のことでした。これまで不思議に思いつつ解決がつかなかったさまざまな現象が、「文法化」という観点を導入するとうまく説明できることが分かり、多くの論文をまとめ、フランス関係以外の国内外の複数の学会で研究発表を行い、またフランス語と日本語との比較や、日本語オンリーの研究なども始めました。

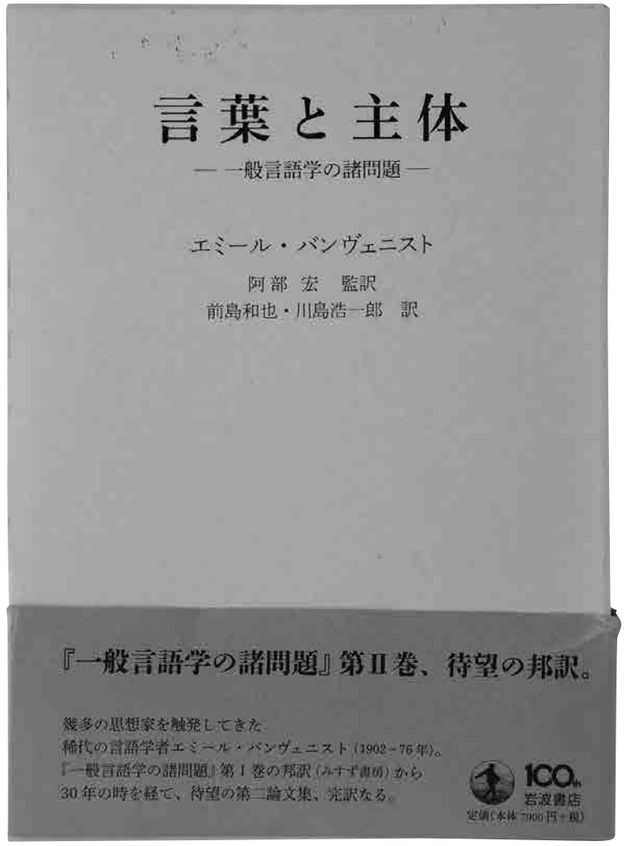
★

フランスでは、ソシュールと二生の親交を結ぶことになるアントワーヌ・メイエ（1866―1936）が、「一般法則」という表現で、すでに二〇世紀初頭にこの種の現象を指摘していたのですが、あまり注目されないままだったのです。教授は、『言葉に心の声を聞く』の「第五章　文法化」において以下のように述べています。

メイエは、「have＋過去分詞」という構成が、印欧語のさまざまな言語において、まず現在完了形として現れてきて、その後しだいに過去時制の機能を帯びていき、ついには元からあった過去時制に置き換わってしまうという、共通の傾向を発見しました。こう考えると、英語の現在完了形とフランス語の複合過去形の類似は偶然の一致では全くなく、ある同一ルート上の単なる進度のちがいということになってきます。（中略）

haveはもともと「～をもつ」という意味の他動詞ですので、この変化の過程はhaveが語彙的意味を希薄化し、かわりに文法的機能を獲得していく過程ともいえます。このように文法的な語の起源を遡っていくと、ほとんど必ず語彙的な意味に行き着きます。この逆の、文法的な意味から語彙的な意味への変化は、ごくわずかの例外を除けば観察されないのです。したがって、こうした変化の道筋をメイエは「文法化（grammaticalisation）」となづけ、音変化、類推に追加すべき第三の通時的変化の原理として提示しました。ただ、まだ1906年の時点では、メイエはこれに「一般法則」という便宜的名称を与えていたのです。

その一方で、アメリカでの動きに関しては、教授は、バンヴェニストの著作の監訳『言葉と主体』の「監訳者まえがき」において、以下のように述べています。



エミール・バンヴェニスト『言葉と主体』の翻訳書（2013年 岩波書店）

その後、アメリカ合衆国のノーム・チョムスキー（1928年生）によって提唱された生成変形文法がヨーロッパ大陸にも影響を及ぼすこととなるが、その一領域たる生成意味論の枠をジョージ・レイコフ（1941年生）、ロナルド・ラネカー（1942年生）らが内部から打ち破る形で打ち立てた認知文法は、構造主義や生成変形文法で等閑視されてきた観のある「言語における意味とは何か」という問いそのものと言えよう。また、意味は、特定の共時態において分析されるのみならず、外界認知との関連において、通時的変化の相において、類型論の観点から、あるいはまた話者との関係において捉えられることとなった。

ここでキーワードになるのが、「主観性・主体性（subjectivity）」、「文法化（grammaticalization）」、「概念メタファー（conceptual metaphor）」、「意味拡張（semantic extension）」などの概念であるが、これらはブレアル、メイエ、シャルル・バイイ（1865―1947）らによる伝統的フランス語学の意味研究の系譜において19世紀末、あるいは20世紀初頭からすでに萌芽的形態で提唱されていたものであり、バンヴェニストの一般言語学研究がまさに関心を寄せるテーマでもあるのである。その意味で、本書や『諸問題』は、現代の言語研究は常にここに立ち戻り、発想を汲み取り発展させるべき源のようなものである。

バンヴェニストの翻訳は引き受けてから完成までに10年近くかかってしまったのですが、この間での最も大きな収穫は、言語学のみならず内外の文学研究の世界にも大きな議論を巻き起こした彼の時制論は、『言葉と主体』に収録された論文「言葉と人間の経験」で述べられた彼の時間論概念をベースとしたものであること、またこの時間論は日本ではほとんど知られていないイギリスの哲学者マクタガート（1866―1925）に影響を受けていることを発見したことです。

4.「主観性」という視点

教授は、『言葉と主体』の「監訳者まえがき」において、

構造主義に対するバンヴェニストのスタンスは、心理学で言われる両面価値的でもある。一方で言語学の発展における構造主義の多大な寄与を認めつつも、他方で言語学であれ、記号学であれ、記号の使用者の存在、つまり主観性への認識を欠いた研究は真の研究たりえないという立場は一貫している。

と続けています。「主観性」という視点への深化です。これに加えて教授は、『言葉に心の声を聞く』の「第七章　主観性とは」においては、

一つの文の中に、情報とその情報に対する話し手の判断という質の異なる二つの部分を区別できること、後者に特化した表現、つまり主観性に関する表現があること、を述べました。

主観性とは、非常に大ざっぱには「心に関連した性質」ということになりますが、言葉と心との関係は多様で、主観性という語も結果的にはさまざまな意味を帯びています。

と「主観性」についての説明を始めています。

★

文は、伝達されるべき情報の部分と、その情報へのコメントの部分とに分けられます。例えば、「彼は病気だろう」では「彼＝病気」が情報で、「だろう」がコメントです。このコメントは、「彼＝病気」という情報の「真実性」がどの程度かを述べています。「だろう」は、「真実性」を85％くらいに見積もっているのではないでしょうか。この種のコメントに関わる機能はモダリティ（modality）、あるいは最近の表現では「主観性」といわれます。

教授は、『言葉に心の声を聞く』の「第七章　主観性とは」において、

つまり主観的な表現としては、どのようなものがあるのでしょうか。大きく分けて少なくとも以下の3種類が区別できるように思われます。

① 心理を表す文章
② 心理を表す語彙
③ 判断を直截に伝える形態
（中略）

言葉の科学が主たる研究対象とするのは、①の文章レベルの主観性でも②の語彙レベルの主観性でもなく、③の主観性です。（中略）③の主観性は心理というよりも話し手の心の介入であり、この介入は無意識レベルで瞬時に働くので、いちいち話し手や書き手の顕在意識には上りません。いわば、言葉を発する時に、口の開きの程度や、声帯の震えの有無、舌の位置などをわれわれがいちいち意識したりしないのと同じような自動的な過程なのです。

こう考えてくると、ブレアルの「主観的側面」、つまり「たぶん～だろう」や「～らしい」などの話者の判断を表す表現、バンヴェニストの「言葉の主観性」、つまり「（僕は）～だと思う」、「（僕は）～と約束する」のようなやはり話し手の判断や意志を表す表現、時枝（誠記）の「辞」、つまり「～か？」、「～だろう」、「～しろ」、「～ない」などのそれぞれ必ず話し手が発話の責任主体となる質問、推測、命令、否定などの表現こそが、まさに③の主観性にあたるものであることが分かります。

とまとめています。

★

語は、「文法化」が進むと「主観性」を表すようになる、とも言われているように、「文法化」と「主観性」の観点に立脚してみると、表面的には全く異なるように見えていたフランス語や英語などの欧米語と日本語において、むしろ意外な類似性が次々に見出されるように思われます。

教授は、フランス語の研究の中で主観的と考えられるフランス語の例を見つけ、対比する形で日本語に関する考察へと進みました。例えばフランス語の比較構文への着眼など、フランス語での論文が先行したのです。しかし、その発想の源には日本語があったのではないか、日本語的な見方でフランス語を見ていたから気づいたのではないか、と教授は当時を振り返っています。

膠着語である日本語では、「主観性」に限らず文法を担う要素が単位化して顕在的になっていることが多いのですが、欧米系の言語ではそれが語彙の多義性の一つとして、他の意味の間にひっそりと紛れて目立たなくなっていることがあります。おそらくそのせいかと思われますが、欧米系の研究者の「主観性」分析は繊細さに欠けるように思われることがあります。

★

2015年にまとめた『言葉に心の声を聞く』において教授は、あえて日本語の問題に絞って「主観性」の可能性について論じています。この本で教授は、「主観性」には「真実性」だけではなく、同じだけの重要性をもった「望ましさ」という主観性があるということを強調しています。

この中では「男の中の男」「以上」「多少」などの日本語の表現が例示されていますが、当然それぞれに対応するフランス語や英語の表現があり、それらについては内外の学術誌で個別の論文を発表しています。併読してみれば、系統関係もないはずのフランス語・英語と日本語との類似性に改めて驚かされるでしょう。教授が日本語のネイティブ・スピーカーとして、日本語を通して欧米語を観察する視点を持てたからこその発見であったように思われます。

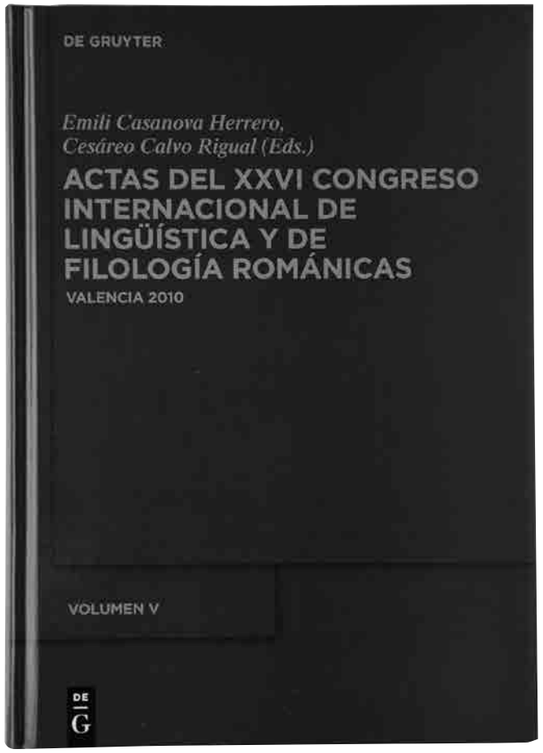
ちなみに、教授は『言葉に心の声を聞く』の「第三部　主観性」の「第六章　言葉を話す人間」において、バンヴェニストより早く言葉における主観性にて考察を行った日本人として、国語学者・時枝誠記（1900—1967）に言及し、

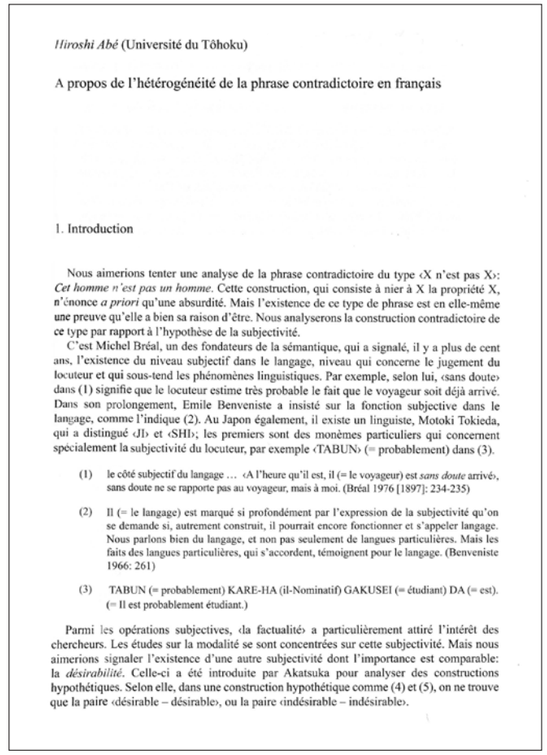
さらに興味深いのは、時枝が表現レベルに具体的に「辞」が現れていないとしても、言葉の背後には常に話し手の判断が潜在しているのだ、と考えていることです。こう見てくると、ブレアルやバンヴェニストと時枝は、フランスと日本という文化圏はそれぞれ異なっていても、言葉における主観性とは何か、という同種の問題について考えを巡らせ、基本的に同様の結論に至っていたことがよくわかります。

とまとめています。教授は、さらにさかのぼって、江戸時代の国学者・鈴木朗（1764—1837）という人物が、言葉には心の声を表す一部の特殊な表現があると言っていることにもふれています。

このような考察は、フランス語では例えば「A propos de l'hétérogénéité de la phrase contradictoire en français」と題し、ブレアルや時枝にもふれた論文となり、スペインで発行されている論文集『ACTAS DEL XXVI CONGRESO INTERNACIONAL DE LINGÜISTICA Y DE FILOLOGIA ROMANICAS』に収録されています。

教授は、『言葉に心の声を聞く』の「第四部　望ましさ」の冒頭、「第八章「最高」」の一節で、ソシュールの教え子であるシャルル・バイイ




Hiroshi Abé (Université du Tôhoku)

A propos de l'hétérogénéité de la phrase contradictoire en français

1. Introduction

Nous aimerions tenter une analyse de la phrase contradictoire du type ‹X n'est pas X›: *Cet homme n'est pas un homme*. Cette construction, qui consiste à nier à X la propriété X, n'énonce *a priori* qu'une absurdité. Mais l'existence de ce type de phrase est en elle-même une preuve qu'elle a bien sa raison d'être. Nous analyserons la construction contradictoire de ce type par rapport à l'hypothèse de la subjectivité.

C'est Michel Bréal, un des fondateurs de la sémantique, qui a signalé, il y a plus de cent ans, l'existence du niveau subjectif dans le langage, niveau qui concerne le jugement du locuteur et qui sous-tend les phénomènes linguistiques. Par exemple, selon lui, ‹sans doute› dans (1) signifie que le locuteur estime très probable le fait que le voyageur soit déjà arrivé. Dans son prolongement, Emile Benveniste a insisté sur la fonction subjective dans le langage, comme l'indique (2). Au Japon également, il existe un linguiste, Motoki Tokieda, qui a distingué ‹JI› et ‹SHI›; les premiers sont des monèmes particuliers qui concernent spécialement la subjectivité du locuteur, par exemple ‹TABUN› (= probablement) dans (3).

(1) le côté subjectif du langage … ‹A l'heure qu'il est, il (= le voyageur) est *sans doute* arrivé›, sans doute ne se rapporte pas au voyageur, mais à moi. (Bréal 1976 [1897]: 234-235)

(2) Il (= le langage) est marqué si profondément par l'expression de la subjectivité qu'on se demande si, autrement construit, il pourrait encore fonctionner et s'appeler langage. Nous parlons bien du langage, et non pas seulement de langues particulières. Mais les faits des langues particulières, qui s'accordent, témoignent pour le langage. (Benveniste 1966: 261)

(3) TABUN (= probablement) KARE-HA (il-Nominatif) GAKUSEI (= étudiant) DA (= est). (= Il est probablement étudiant.)

Parmi les opérations subjectives, ‹la factualité› a particulièrement attiré l'intérêt des chercheurs. Les études sur la modalité se sont concentrées sur cette subjectivité. Mais nous aimerions signaler l'existence d'une autre subjectivité dont l'importance est comparable: la *désirabilité*. Celle-ci a été introduite par Akatsuka pour analyser des constructions hypothétiques. Selon elle, dans une construction hypothétique comme (4) et (5), on ne trouve que la paire ‹désirable – désirable›, ou la paire ‹indésirable – indésirable›.

『ACTAS DEL XXVI CONGRESO INTERNACIONAL DE LINGÜISTICA Y DE FILOLOGIA ROMANICAS』

（1865—1947）を紹介し、以下のように述べています。

彼はその著書『一般言語学とフランス言語学』（1965）の中で、だいたい以下のようなことを述べています。

「文には常に話し手の積極的関与がある。つまり、例えば「雨が降る」という事態があったとすれば、それは確実と思うかそう思わないか、歓迎するか嫌がるか、起こることを期待するか起こらないことを期待するか、の3種類の関与である。これらはそれぞれ、「事実判断」、「価値判断」、「意志」の作用である。」

（中略）

バイイが言及した3種の主観性、「事実判断」、「価値判断」、「意志」ですが、「事実判断」は「真実性」にあたるものであることを述べました。また、「価値判断」とは、ある事態について話し手がそれを「望ましい」ととらえるか、「望ましくない」ととらえるか、という働き、「意志」とは、ある事態について話し手がその成立を求めるか求めないか、ということでした。

この後者の2つの主観性は、「真実性」と比肩される重要性をもったものですが、これまで個別の現象についてこれらの主観性に関わるような散発的な指摘はされても、残念ながらいまだ体系的な研究が行われていません。特に「望ましさ」については、その存在すらほとんど認識されていない状況です。しかし、この主観性を仮定することで、説明可能となる現象はきわめて多いように思われます。

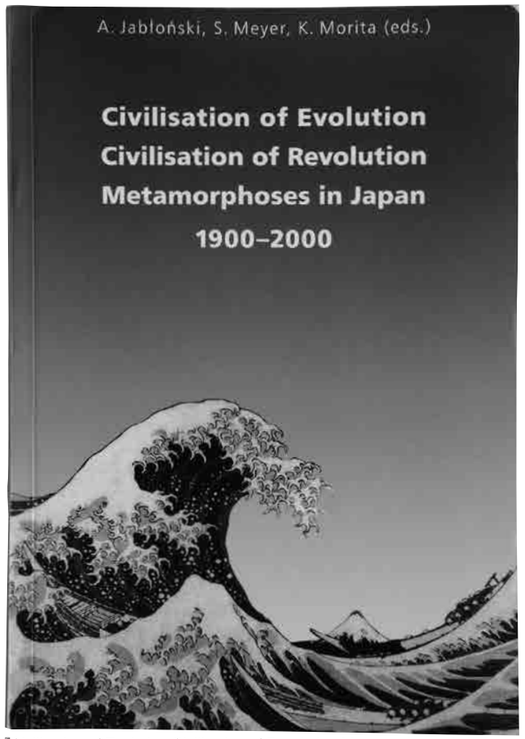
5. ヨーロッパの「日本学研究」との連携

フランス語の研究から始まっている教授の研究成果は、フランス語、日本語などで発表すると同時に、ヨーロッパやアジア各地で開かれる学会などでも発表、講演する機会が少なくありません。

例えば2007年には、ポーランド（クラクフ）のヤゲッフォ大学とマンガミュージアムの共催で開かれたシンポジウムに参加し、日本語で「日本語における「望ましさ」概念について」を発表。論文は、シンポジウムの報告書である『Civilisation of Evolution Civilisation of Revolution Metamorphoses in Japan 1900—2000』に収録されています。

このような活動の中で、教授にはいま、ヨーロッパでは「日本学」が盛んになっているという印象が強くなっています。例えばヨーロッパでは1973年に「ヨーロッパ日本学研究協会（EAJS: The European Association for Japanese Studies）」という組織が結成され（事務局：ドイツ・ベルリン自由大学）、2000年にはヨーロッパの日本研究者のネットワークを構築するための「PEDワークショップ」が開始されました。

2017年9月には3年に1度の協会総会がポルトガルのリスボンで開かれる予定となっており、教授も参加を目指しています。



『Civilisation of Evolution Civilisation of Revolution Metamorphoses in Japan 1900-2000』

日本学研究に関する講演の様子